

なかしまのぶあき

## 中島信徴

中島定房の長男。母は高橋喜次郎三女明旦<sup>けき</sup>で、美玉三平<sup>みたまさんべい</sup>の姉。戸籍名は一三<sup>いちぞう</sup>。号は白圭。諱は信徴。若くして薩摩藩お抱え絵師の馬場伊歳に学ぶ。文久年間に、島津本家に復帰した島津久光に仕えるようになり、江戸の有職故実家の栗原信充が来鹿すると、信充に入門し有職故実を学ぶ。慶応年間には鹿児島城二の丸に設けられた取調所に出仕して師の著作物の出版の編集に携わる。明治以後、玉里島津家の雇となり、明治29年(1896)まで勤めた。晩年には、木脇啓四郎が思い立った「慶長之役合戦図屏風」の復元の仕事を引き継ぎ、これを完成させた。中島信徴は啓四郎が最も信頼を寄せる人物であった。

天保7年～明治39年(1836～1906)

くりはらのぶみつ

## 栗原信充

幼名、陽太郎。字、伯任。通称、孫之丞。号、柳庵、又楽。幕府の奥右筆を務める。有職故実に通じ、師の屋代弘賢の『古今要覧稿』の編纂に関わる。勤皇論を唱え、日本書紀や令などを講義したため、勤皇の志士たちの入門者が多かった。薩摩藩では、啓四郎を初め、高橋祐輔(美玉三平)、岩下方平らが入門している。元治元年(1864)、島津久光の招聘により、次男の寅次郎信允、孫の巨摩之丞信和とともに鹿児島に至り、久光の援助によって『軍防令講義』『官位令講義』『職原鈔私記』を薩摩藩版として出版した。幕末、江戸から京都に移住し、有栖川家の保護を受けていた。明治3年、京都で没。著書には上記の他に、『玉石雑誌』『武器袖鏡』『甲冑図式』『水岡雑誌』など。

寛政6年～明治3年(1794～1870)

えぐちぎょうはん

## 江口暁帆

鹿児島出身の絵師。名、親雄。通称、宗助(蘇助)。号、暁帆(暁颯)。絵を狩野派の薩摩藩お抱え絵師、佐多椿齋に学ぶ。明治2年(1869)に鹿児島藩十一等絵師助、同5年(1873)1月には鹿児島県三等教授図画掛となる。同年3月には、日向・大隅・薩摩の産物調査を命じられ、4月上旬～5月下旬にかけて、江夏千城、木脇啓四郎、弟子丸弘喬と日向国を中心に巡回し、調査を行う。その後、内務省に入り、地理寮地誌課の官員として測量などに従事しながら、内国共進会に絵画を出品する。明治20年(1887)、参謀本部陸軍部測量課を依願退職し、神戸に移住。明治26年(1893)、鹿児島に帰郷。明治39年(1906)には島津本家の臨時図画取調嘱託となる。大正10年(1921)3月8日没。

天保10年～大正10年(1839～1921)

けいしろう どうじろう  
啓四郎・藤次郎肖像写真

ガラス板、桐箱  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

啓四郎と次男藤次郎（当時14歳）。明治6年2月5日、東京で撮影したもの。箱書きには啓四郎の年齢が「五十六歳」とあるので、前年の明治5年撮影の可能性もある。

1

けいしろう やたろう どうじろう  
啓四郎・弥太郎・藤次郎肖像写真

ガラス板、桐箱  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

中央の椅子に啓四郎、左に長男弥太郎、右に次男藤次郎が立つ。箱書きによると、明治6年（1873）5月17日に東京で撮影したもの。長男弥太郎は同年4月、島津久光、その息子悦之助・真之助に随行して上京した。それ以前に東京に出ていた父と弟とともに記念のため撮影したものと思われる。

2

藤原姓木脇氏系図

明治5年（1872）成  
一卷  
個人蔵

本家の木脇祐治と啓四郎が協力して作成した木脇家の系図。明治5年7月成。系図は太織官藤原鎌足に始まり、工藤祐経を経て、明治時代の木脇祐治に至る。

3

きのわきにへいじ  
木脇仁平次遺言写

木脇仁平次（1762～1818）、木脇啓四郎写  
写本  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

啓四郎の父、仁平次祐長が、文化15年（1818）、死に臨んでしたためた遺言書の写し（啓四郎写）。木脇本家の当主や親類の者、計5名に宛てて、家計のこと、妻子の身の処し方などについて後事を託す内容。

4

## 萬留

木脇啓四郎 明治31年(1898)  
写本 半紙本 一冊  
鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

明治31年(1898)、82歳の啓四郎がまとめた自身の一代記。啓四郎が見聞したものだけでなく、噂話や説話なども含み、幕末から明治の薩摩藩について多彩な内容をもつ。

5

## 履歴書

木脇啓四郎  
一枚  
鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

啓四郎自筆の履歴書(控え)であるが、明治17年4月、菱刈・始良・桑原・曾於郡御用掛に就職する際のものであろう。生年を実際よりも5年遅く書いてあるのに注意。

6

## 御受書

木脇啓四郎  
一枚  
鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

啓四郎の自筆の受書(控え)。明治17年4月15日に菱刈・始良・桑原・曾於御用掛を命じられ、それを承諾する内容。

7

## 植物図

木脇啓四郎 天保2年(1831)写  
大本 一冊  
鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

「真写本」と題された冊子に収められた一図。啓四郎の絵のうち、年代の分かる極早い時期のもの。天保2年(1831)2月6日写。啓四郎が御茶道方として、藩主島津斉興の実母、宝鏡院のために営まれた唐湊別邸(錦崎御茶屋)へも出入りしていたことがわかる資料である。

8

## 山水図

税所文豹 (?~1852)  
双幅 紙本墨画淡彩  
鹿児島市立美術館蔵

左幅の崖の立体的な表現は忠実な写生に基づいており、四条派の技法がよく表れている。

9

図録 p.4

## 天神図

税所文豹 (?~1852) 嘉永元年 (1848)  
一幅 絹本着色  
個人蔵

薩摩の書家として有名な鮫島黄裳 (白鶴) の賛。

10

やまとたけるのみこと

## 倭建命 図

税所文豹 (?~1852)  
一幅 絹本着色  
個人蔵

古事記や日本書紀で有名な倭建命 (日本武尊) の立像。手には草薙の剣を持つ。

11

## 金閣寺図

税所文豹 (?~1852)  
一幅 紙本着色  
鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

四条派では写生を重視したため、京都などの神社・仏閣の風景図が多く描かれた。

12

じんぐうこうごう  
神功皇后図

平山東岳 (1834~1899)  
一幅 絹本着色  
個人蔵

平山東岳 (1834~1899) は上荒田郷中出身であり、啓四郎の後輩に当たる。名は季雄。通称は竜助。鹿児島で甲斐東溪に学んだのち、京都で四条派の長谷川玉峰、塩川文麟に師事した。

14

## 税所文豹書簡 (木脇藤洵宛)

税所文豹 (?~1852)

継紙

鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

税所文豹 (龍右衛門篤之) が啓四郎に宛てた年賀状。後半の追伸の部分に「御改正」(天保の改革と推定) が一段落したという内容が見え、弘化元年 (1844) の正月、京都から江戸に出て初めての新年を迎える啓四郎に宛てたものと推定される。江戸名所の写生や茶器の写生を勧めるなど絵画の面で興味深い内容をもつ。

13

## 京百景 短冊

九枚

鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

木脇家文書に伝わった京都の名所を描いた短冊9枚。筆者は特定できないが、四条派風の淡彩で描かれている。

15

## 兎図

木脇啓四郎  
帖（仮綴）のうち一枚  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

啓四郎の模写図の一枚。四条派風の筆づかいがよく表れている。

16

## 東海道諸所真写

木脇啓四郎  
一枚  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

本書は東海道筋を中心とした名所の図等を集めたもの。原図が別があり、それを再写して1冊にまとめたものと推定される。嘉永3年（1851）江戸下りの途中、奈良方面を旅した時の三輪神社の写生図（上図）と天保15年（1844）の江戸向島から浅草を望む風景。

17

## 東海道風景図

木脇啓四郎 天保14年（1843）  
一枚  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

天保14年（1843）、啓四郎が江戸へ下る時に写した風景図。

18

## 奈良・京都嵐山渡月橋等風景図

木脇啓四郎  
帖（仮綴）のうち一枚  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

啓四郎が京都・奈良の名所を写した風景図。

19

## 江戸浅草・霊巖橋図

木脇啓四郎 天保15年(1844)、嘉永6年(1853)  
二枚(合一枚)  
鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

上の図は天保15年(1844)7月に描いた、隅田川方面から浅草を望む図。

下の図は、嘉永6年(1853)の江戸霊巖橋(現在の中央区)の風景。

20

## 三輪山風景図

木脇啓四郎 嘉永3年(1850)  
一枚  
鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

嘉永3年(1850)、三輪神社の御神体である三輪山を描いたもの。

21

## 奈良猿沢池図

木脇啓四郎 嘉永3年(1850)  
一枚  
鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

嘉永3年(1850)、奈良の猿沢池(現、奈良公園内)を描く。

22

## 大和竜田東ノ堤より見る図

木脇啓四郎 嘉永3年(1850)  
一枚  
鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

嘉永3年(1850)9月23日、紅葉の名所である大和国竜田を描いた図。

23

## 立花図

木脇啓四郎  
一卷

鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

啓四郎が自ら身につけた池坊流の立花の型を後世に残すために作成した立花図の巻物。生花図の一卷と一対をなす。島津本家と玉里島津家に献上したものの写し（控え）と推定される。

24

図録 p.4

## えびはらきよひろ 海老原清熙履歴概略

写本  
鹿児島県立図書館蔵

薩摩藩の天保の改革を主導した調所<sup>ずしよひろさと</sup>広郷の右腕として活躍した海老原清熙の履歴を記したものの。啓四郎が江戸に下る年の天保14年（1843）ごろ、西洋列強に対抗するために「軍政更革」を思い立ったことが記されている。

25

## 官板 白氏文集

白居易（772～846） 文政6年（1823）刊  
中本 三十冊  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

啓四郎が江戸詰の際、江戸芝神明前の本屋、岡田屋嘉七の店で購入した『白氏文集』。中唐の詩人、白居易（楽天）の詩文集。

26

## 巡国日記

木脇啓四郎  
写本  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

嘉永5年（1852）4月13日から6月7日までの間、啓四郎が小原四郎兵衛（親重）、吹田秀太郎、山城屋久兵衛と甲冑などの武具を調査・探索するために東北・北陸・北関東を巡回した際の旅日記。仙台の伊達藩では甲冑の売り買いが御禁制で、購入を謝絶されている。

27

## 島津折烏帽子えぼしの模型

三点 紙製  
鹿児島大学附属図書館（伊勢家文書）蔵

「島津折」とは、島津家初代忠久が源頼朝に謁見するときに用いた烏帽子で、江戸期にこの型は廃れていた。啓四郎は師の栗原信充から島津折のことを聞き、越前国岩船神社所蔵の画像に基づき復元、藩主斉彬に献上した。本模型がいつ作成されたなど詳細は不明ながら、試作段階で作成されたものであろう。

## 旧薩藩御城下絵図（部分）

複製  
原本：鹿児島県立図書館蔵

甲冑製作所が置かれたのは、末川近江の屋敷の門前であった。本絵図の「御用地」とある場所と推定される。

## ちごよろい 稚児鎧

一領  
一般財団法人共研舎蔵

木脇家に伝来した稚児鎧（子供用の鎧）で、幕末期、啓四郎の指揮の下、甲冑製作所で作られたものと思われる。威おとしは色々威で、木脇家の紋所である九曜の紋が入る。かつて妙円寺参りの時には「木脇殿の稚児鎧」と言って着用するのを名誉としたと伝える。

## 兜図

木脇啓四郎 安政3年(1856)

一枚

鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

巡回した際写し取った兜などの図を集めた「兜図集冊」(全96枚を仮綴じにする)のうちの1枚。図中の「井尻神力坊」とは日新斎島津忠良の家臣で全国を納経のため行脚した武士。井尻神力坊が着用した兜であることを示すものと推定される。

31

## 兜図

木脇啓四郎

一枚

鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

32

## 兜図

木脇啓四郎

一枚

鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

33

## 鍬形・鍬形台図

木脇啓四郎

一枚

鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

鍬形、鍬形台などを蠟墨で摺り取ったもの。高山郷(現、鹿児島県肝付町)の守屋舎人の所蔵。

34

## 兜図

木脇啓四郎

一枚

鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

三十二間の兜を横から写したもの。右上に「天辺の座」と呼ばれる兜の天頂部を写した図を添える。「鹿屋郷之原千吉」と所蔵者の名がある。

35

## 刀図

木脇啓四郎  
一枚

鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

「聖武天皇御劔 奈良廻東大寺御宝物」  
左に「明治三十年九月十四日 八十一才祐業写」  
とある。

図録 p.5

36

## しよくげんしょうしき 職原鈔私記

栗原信充（1794～1870）著 元治元年（1864）刊  
大本 存六卷六冊  
鹿児島大学附属図書館（玉里文庫）蔵

南北朝時代の武将、北畠親房が著した『職原抄』  
の注釈書。島津久光は、栗原信充のこの書を「薩  
摩府学蔵版」（薩摩藩版）として出版することを  
命じた。本書はその校合本（校正の朱入り）で、  
内題等を挿入するように指示がされている。

37

## しよくげんしょうしき 職原鈔私記

栗原信充（1794～1870）著 慶応4年（1868）刊  
大本 十一卷十一冊  
鹿児島大学附属図書館（玉里文庫）蔵

「薩摩府学蔵版」（薩摩藩版）として出版された  
刊本。

38

## ぐんぼうりょうこうぎ 軍防令講義

栗原信充（1794～1870）著 慶応2年（1866）刊  
八卷八冊  
鹿児島大学附属図書館（玉里文庫）蔵

律令の「令」のうち、軍に関するものについて  
の注釈書。

39

りょうのこうぎ  
令講義

栗原信充 (1794~1870) 著、島津久光 (1817~1887) 写  
写本 大本 三卷三冊  
鹿児島大学附属図書館 (玉里文庫) 蔵

学問好きな島津久光 (1817~1887) は、元治元年 (1864)、啓四郎に命じて栗原信充を江戸から呼び寄せ、令の講義を直接受けた。また、慶応元年 (1865) 自ら信充の官位令・職員令などの講義を筆写した。

40

みたまさんぺい  
美玉三平図

中島信徴 (1836~1906)  
一幅  
個人蔵

美玉三平は、武村出身の薩摩藩士高橋親輔 (通称、祐次郎) のこと。中島信徴の母方の叔父あたる。文久3年 (1863) 生野の変で福岡藩士平野国臣と共に、但馬国生野の代官所を襲撃したが鎮圧された。享年42。明治になって従四位を追贈される。栗原 (武田) 信充は弟子の三平に、無楯 (甲州武田家嫡流に伝えられる「楯無鎧」のことか) の古い形式で自ら作った鎧を贈り、これを着て王事に励むように言ったという。「贈従四位美玉三平親輔四十一歳像 / 師武田信充翁依無楯之古製 / 自手作而與之親輔曰他日著此 / 甲勤於王事云々故著中之圖 / 中島信徴 (朱印)」

42

如意宝珠図

栗原信充 (1794~1870) 元治元年 (1864)  
一幅  
個人蔵

元治元年 (1864) 6月、鹿児島に滞在中の栗原信充が、中島信徴 (白圭) に贈ったもの。これを持つと万事が意のままになるという宝珠を描く。「萬事如意 / 元治元年六月 於慶府書 / 以贈高橋氏賢住中島雅兄 七十二翁 信充 (朱印) (朱印)」

41

天の逆鉾図

木脇啓四郎、栗原信充 (1794~1870) 元治元年 (1864) 刊  
継紙  
鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

来鹿した栗原信充らは、久光の許可を得て、元治元年7月、霧島登山を行う。本図は、啓四郎が作成した天の逆鉾の真写図に、信充の考証文を加えて上梓された一枚刷である。江戸の版木師木村嘉平の彫った版木は、霧島山華林寺に奉納された。

43

図録 p.6

## 小林郷陰陽石図

関盛長、木脇啓四郎 慶応3年(1867)12月刊  
一紙  
個人蔵

日向国諸県郡小林郷東方村(現在の宮崎県小林市東方)の岩瀬川の中にある陰陽石を絵と文章によって紹介した一枚刷。絵は啓四郎が担当し(「祐尚画」とある)、文章は関盛長(平田派の国学者)が執筆している。版下は筆跡から中島信徴が担当したと推定される。

## 小林郷陰陽石図原稿

木脇啓四郎  
一紙

鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

小林郷陰陽石図の原稿。啓四郎筆。枠(匡郭)の外側に、それぞれの行の字数がメモされている。この資料から啓四郎が本図の編集の中心にいたことが知られる。

## 啓四郎生涯の順序覚書

木脇啓四郎  
写本

鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

啓四郎が晩年、自己の生涯を振り返って書きとめた覚書。『萬留』の内容と重なる部分も多いが、藩版の取調所(編集所)が島津久光の居住する鹿児島城二の丸に置かれたことなど、貴重な内容を含んでいる。

## 職務解免御暇願内意之覚

中島一三（信徴）（1836～1906）

複製

原本：個人蔵

還暦を迎えた中島一三（信徴）が、明治29年（1896）1月14日付けで玉里島津家家扶に対して提出した辞職願の控え（自筆）。啓四郎および中島一三（信徴）の藩版との関わりがつぶさに書きとめられている。

47

## 武者図

中島信徴（1836～1906）

一幅 絹本着色

個人蔵

歴史画で有名な菊池武保（容斎、1785～1878）の絵をもって描いた武将図。甲冑に身を固め、鎧櫃に腰をかけた武将の目には、武士の気魄があふれる。

49

## 源義経馬上姿図

中島信徴（1836～1906） 明治35年（1902）

一幅 絹本着色

個人蔵

落款に「中島信徴六十七歳画」とあり。

48

## 桜島・天保山・磯山図

江口暁颯（暁帆）（1839～1921） 明治33年（1900） 仲春

三幅対 絹本着色

鹿児島市立美術館蔵

明治33年（1900）仲春に作成された三幅対。左幅に磯山と霧島、中幅に桜島、右幅に前之浜から天保山、開聞岳を配し、鹿児島湾の雄大な景色を描く。

50

## 高砂図

江口暁颯（暁帆）（1839～1921） 明治37年（1904）初夏  
一幅 絹本着色  
個人蔵

51

にちぐうさつじゅんかいさいてきひんいそず  
日隅薩巡回採摘品彙鹿図

明治5年（1872）  
複製（Image: TNM Image Archives）  
原本：東京国立博物館蔵

桜島図.

「鹿児島洲崎堤ヨリ／櫻島ヲ見ル」との書入れがある。細い描線の筆致から啓四郎の絵ではなく、江口親雄（暁帆）の手になるものと推定される。

52

にちぐうさつじゅんかいさいてきひんいそず  
日隅薩巡回採摘品彙鹿図

明治5年（1872）  
複製（Image: TNM Image Archives）  
原本：東京国立博物館蔵

鳥図.

「木脇氏写生」と書入れがある。啓四郎による写生図で、書入れは別人の筆である。鉛筆で下書きし、墨で描写している。頭部の羽の模様は、一部を描き込み、他の部分は省略している。

53

にちぐうさつじゅんかいさいてきひんいそず  
日隅薩巡回採摘品彙鹿図

明治5年(1872)

複製 (Image: TNM Image Archives)

原本：東京国立博物館蔵

魚・蝙蝠図。

魚図の書入れに、日付や差出した人物、写生した場所が書いてある。展示は蝙蝠図の背面であるが、別に前面と側面とが角度を変えて描かれている。

54

にちぐうさつじゅんかいさいてきひんいそず  
日隅薩巡回採摘品彙鹿図

明治5年(1872)

複製 (Image: TNM Image Archives)

原本：東京国立博物館蔵

阿蘇山図。

本図の書入れには「肥後国阿蘇山ヲ日向国堺ヨリ／遠望シテ祐尚写 凡五里許ヲ隔ト云」とある。山の姿を墨の濃淡を用いて描写している。

56

にちぐうさつじゅんかいさいてきひんいそず  
日隅薩巡回採摘品彙鹿図

明治5年(1872)

複製 (Image: TNM Image Archives)

原本：東京国立博物館蔵

河童足図。

南九州には各地に河童(河伯)の伝承を伝える土地が多く存する。また、島津重豪などの博物を愛好する大名の間でも河童の存在を信じ、図も多く描かれた。

55

にちぐうさつじゅんかいさいてきひんいそず  
日隅薩巡回採摘品彙鹿図

明治5年(1872)

複製 (Image: TNM Image Archives)

原本：東京国立博物館蔵

滝図・トンボ図・蝙蝠図。

滝図は、臼杵郡神門村と坪谷村の間にある小滝。5月6日写。トンボ図は「壬申四月十六日／祐尚寫」とある。大きさが図の通りであるとも記されている。本図が収められている2冊目は、風景のほか、後半には鳥や神社収蔵の古物、古墳の出土品の図などを載せる。

57

にちぐうさつじゅんかいさいてきひんいそず  
日隅薩巡回採摘品彙鹿図

明治5年(1872)

複製 (Image: TNM Image Archives)  
原本: 東京国立博物館蔵

壺図・舞楽面図.

劍柄神社蔵の面図は原寸大である。壺図は宮崎郡宮王丸村の農民の屋敷から出土したものを啓四郎が写したものの。

58

にちぐうさつじゅんかいさいてきひんいそず  
日隅薩巡回採摘品彙鹿図

明治5年(1872)

複製 (Image: TNM Image Archives)  
原本: 東京国立博物館蔵

鏡図.

古鏡二面を描く。ひとつは劍柄神社蔵の鏡で表と裏を描き、もうひとつは、土中から出土したもの。前者の鏡は、江夏干城著『日向國諸神社記録并陵墓窟等圖』(明治6年、東京国立博物館蔵)にも「倭鏡 壹面 徑三寸七步裏有鳳凰并花圖等」と記載がある。

59

にちぐうさつじゅんかいさいてきひんいそず  
日隅薩巡回採摘品彙鹿図

明治5年(1872)

複製 (Image: TNM Image Archives)  
原本: 東京国立博物館蔵

植物図.

巡回した人物の名が散見される。右下の付記に書かれた「祐尚」は啓四郎のことを指し、その左隣に記した「親雄」とは江口暁帆のことである。また上部中央にみえる「直竹」は、他図に「江夏直竹」と、『直竹日誌』と記した箇所があるが、この「直竹」と江夏干城とが同一人物なのかは、断定できない。

60

## 啓四郎 上海日記

木脇啓四郎

複製

原本：鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

島津家の事業を受け継いだ苗代川陶器会社に職を得た啓四郎は、明治8年（1875）陶器の売り込みのため上海に赴く。5月27日、島津忠義（旧知事公）の訪問を受けた後、船に乗り込み、串木野経由で長崎へ、しばらく滞在の後、6月3日上海へ出航する。現在、啓四郎が、鹿児島出発から6月14日帰国するまでの日記を整理し、清書したもの（罫紙35枚）が残る。一方、原日記は書簡などの裏打ちに使用されており、一部が確認できる。展示は冒頭の鹿児島出発の部分。

61

## 小長持入附品覚留

木脇啓四郎

写本

鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

「小長持」（小型の収納用の箱）に入れた資料類（文書や掛軸など）の覚え。その巻末に、啓四郎が自己の履歴などに関する覚書が書き加えられている。その一つが、製茶に関する一件であり、啓四郎が早くから製茶に関心を持っていたものの土地がなく断念したこと、西南戦争後、技術習得のために息子の藤次郎に京都・静岡・埼玉など茶の名産地に出張させたことが見えている。藤次郎が帰ると、一家を挙げて製茶に取り組んだ。

63

## 啓四郎 和歌短冊

木脇啓四郎

鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

明治8年6月3日長崎を出発してまもなく船上で詠んだものと思われる。啓四郎は、陶器の営業を始めたことをきっかけとして名を「祐尚」から「祐業」に改めた。

「支那にものしけるとき／大空の雲となみとになり果て／こゝろほそくもゆく船路哉 祐業」

62

## さつぐうえんそうろく 薩隅煙草録

青江秀著、木脇啓四郎画 明治14年（1881）刊

一冊

鹿児島大学附属図書館蔵

第4・5図。

煙草の花実を描いたものだが、花や実を単体で個別に描いており、種としての特徴をわかりやすく記録した西洋の植物画（ボタニカルアート）のような図である。

64

図録 p.8

さつぐうえんそうろく  
薩隅煙草録

青江秀著、木脇啓四郎画 明治14年(1881)刊  
一冊  
鹿児島大学附属図書館蔵

第74・75図.

第74図(右頁)は農夫が煙草の成長を止める作業をしているところを描いているが、煙草の後ろで作業をする農夫は、煙草の大きさの目安ともなっている。第75図(左頁)では雨粒が葉や地面にあたり、はねている細かな表現が注目される。

さつぐうえんそうろく  
薩隅煙草録

青江秀著、木脇啓四郎画 明治14年(1881)刊  
一冊  
鹿児島大学附属図書館蔵

第128図.

この第128図は、屋内から葉を運び出し、庭先に並べて夜露に葉をさらす煙草製造の一連の作業を示したものだが、それが夜間であることを左ページの子供を背負った女性が月を指すことで表している。

きつぐうえんそうろく  
薩隅煙草録

青江秀著、木脇啓四郎画 明治14年(1881)刊  
複製  
原本：鹿児島大学附属図書館蔵

第133図.

国分における煙草の名産地(12ヶ所)を一望のもとに収めた図である。このように、4ページ連続した風景図も収録されている。近世の名所図会類でも見られる工夫であるが、近景の松をより大きく描くことで遠近を表す洋画の黎明期特有の描き方も見られる。

69

図録 p.8

きつぐうえんそうろく  
薩隅煙草録

青江秀著、木脇啓四郎画 明治14年(1881)刊  
複製  
原本：鹿児島大学附属図書館蔵

第56図.

本書に収められた全156図には図の解説が日本語と英語で付けられている。第56図は、「國分人煙草ノ虫ヲ獲ル姿ヲ示ス」と記され、2人の農夫の手元に目が向く。

70

きつぐうえんそうろく  
薩隅煙草録

青江秀著、木脇啓四郎画 明治14年(1881)刊  
複製  
原本：鹿児島大学附属図書館蔵

刊記.

「定價金五圓」の印が押されている。また版によっては、「畫圖 薩州住 木脇啓四郎」と記載された蔵本もある。

71

しらのかうん  
白野夏雲書簡(啓四郎宛)

白野夏雲(1827~1900) 明治16年(1883)11月8日付  
継紙  
鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

鹿児島県勧業課長の白野夏雲が啓四郎に対して、明治17年4月1日から5月31日まで東京上野で開かれる第2回絵画共進会への絵画の出品を勧めたもの。昨年(明治16年)の第1回目よりも水準が上がるはずであるから、精々よい作品に仕上げるようにと注意している。

72

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
肉筆彩色本 三冊(うち上冊)  
鹿児島県立図書館蔵

第59図 ムギイワシ(原譜名 あだらぎこ)。  
第60図 ホウボウ(原譜名 かながしら)。  
描写方法は、細い墨線で輪郭を描き、その上から彩色をした後に、一番外の輪郭線と<sup>ひれ</sup>鰭の筋目のみを描きおこすという手順である。全344図のうち、ほとんどがこの方法で描かれている。またムギイワシ(第59図)など本紙の大きさ以内の種類はほぼ原寸大である。

73

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
複製(原本:肉筆彩色本)  
原本:鹿児島県立図書館蔵

第61図 ソコカナガシラ(原譜名 かながしら)。  
鱗の表現など細かな筆致が見て取れる。<sup>むなびれ</sup>胸鰭部分に顔料の粒がみられることから、岩絵具も用いたと考えられる。

75

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
複製(原本:肉筆彩色本)  
原本:鹿児島県立図書館蔵

第37図 クルマダイ(原譜名 <sup>ひれ</sup>ひれだい)。  
クルマダイ(第37図)は、<sup>ひれ</sup>鰭にあいた傷穴をそのまま描いている。ここには、西洋の画譜に見られる、あるがままに現実を直視する描写の姿勢が見受けられる。

74

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
複製(原本:肉筆彩色本)  
原本:鹿児島県立図書館蔵

第205図 アオブダイ(原譜名 もはみ(雄))。  
個々の鱗に色のぼかしがなされている。また他図に、たらし込み(日本画の技法のひとつで、色を塗って乾かないうちに他の色を垂らし、にじみの効果を生かすもの)を用いたものもある。

76

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
肉筆彩色本 三冊(うち中冊)  
鹿児島県立図書館蔵

第131図 メジナ(原譜名 くろうお)。  
第132図 クロイシモチ(原譜名 いせじ)。  
木脇家文書には、メジナ(第131図)の下絵と  
考えられる図がある。それは、薄い和紙に墨線  
で描写したのち、裏から描画部分のみに胡粉(貝  
殻からつくられる日本画の白色顔料)が施され  
ている。裏に胡粉を置くことで線を明瞭にみせ  
つつ紙を補強するなどの効果がある。

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
複製(原本:肉筆彩色本)  
原本:鹿児島県立図書館蔵

第204図 アオブダイ(原譜名 もはみ(雌))。  
右肩に方言または通称と考えられる魚名を記し  
ているが、「もはみ」と称した図は8図あり、そ  
のうちの2図には「雌」(第204図)、「雄」(第  
205図)との付記があり、雌雄を描き分けてい  
る。

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
複製(原本:肉筆彩色本)  
原本:鹿児島県立図書館蔵

第207図 キュウセン(原譜名 はち)。  
細部の模様まで実際の魚の彩色を保ったまま写  
生がなされている。その背景には、市場の協力が  
あったことがわかっている。

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
肉筆彩色本 三冊(うち下冊)  
鹿児島県立図書館蔵

第293図 ヌタウナギ(原譜名 ぼしうなぎ)。  
第294図 ノコギリガザミ(原譜名 つかに 腹)。  
刊本の「まえがき」には、「(魚譜配列の)順序はシーボルト博士になった」とある。シーボルトの『日本動物誌』魚類編のヌタウナギには正面図が添えられているが、『魔海魚譜』ヌタウナギ(第293図)にも正面図(全体図より左下)を描き加えた類似点などから、作画においても同魚譜を参照したことがうかがえる。

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
複製(原本:肉筆彩色本)  
原本:鹿児島県立図書館蔵

第281図 ネコザメ。  
正面図がある。他図には、<sup>ひれ</sup>鰭の補足図を添えるものも数点あり、また全体的に共通する描き方として、鰭を開いた状態で示していることから、種としての特徴を科学的に説明するという西洋の学術的な正確さを考慮したことがわかる。

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
複製(原本:肉筆彩色本)  
原本:鹿児島県立図書館蔵

第260図 モンガラカワハギ(原譜名 ほしふく)。  
本図の下絵と考えられる図が木脇家文書に残る。啓四郎は市場で魚の写生を行っていたことは孫の宇都宮貞子氏の証言から知られるが、写生図を本絵に仕立てたのか、写生図から転写したのか、にわかに断定は難しい。

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
複製(原本:肉筆彩色本)  
原本:鹿児島県立図書館蔵

第310図 スナダコ(原譜名 さめだこ)。  
『魔海魚譜』の模写資料として、東京国立博物館所蔵『鹿児島県下産魚類写生』がある。肉筆彩色本(水産博覧会出品本)から約3分の1の図をトレースしたものである。『鹿児島県下産魚類写生』にもスナダコ図があるが、足が1本不足している。

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
複製(原本:肉筆彩色本)  
原本:鹿児島県立図書館蔵

第333図 イタヤガイ.

「魚譜」と称しているが、エビ、カニ、イカ、タコ、貝類も描かれている。イタヤガイは白野夏雲が明治15年に水産博覧会に向けて調査・研究を行った貝で、その報告書は『以太也蚶録』と題して博覧会に出品されている。

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)刊  
二巻二冊  
鹿児島県立図書館蔵

肉筆彩色本を基にして銅版印刷で刊行されたもの。第1回水産博覧会にも出品され、高い評価をうけた。1ページに二種類の魚介類を描き、肉筆彩色本にはなかった魚の名称・漁期・大きさを追記している。全325図収録。

げいかいぎよふ  
魔海魚譜

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治16年(1883)  
複製(原本:肉筆彩色本)  
原本:鹿児島県立図書館蔵

第342図 左 ボウシュウボラ、右 フドロガイ.  
木脇家文書には、「ボウシュウボラ」の下絵があるが、その図には「串木野産」の付記が見える。

げいかいぎよふ  
**魔海魚譜**

白野夏雲編纂、木脇啓四郎・二木直喜画 明治44年(1911)刊  
一冊  
鹿児島大学附属図書館蔵

明治16年刊本を洋装に改め、鹿児島県立第一鹿児島中学校から再版したもの。新に、魚の学名表が巻末に加えられる。

87

いたやがいろく  
**以太也蚶録**

白野夏雲(1827~1900)編 明治15年(1882)成  
写本 一冊  
鹿児島県立図書館蔵

鹿児島湾で獲れる「イタヤガイ(板屋貝)」について、名称、形状、発生、産地、捕収法、販売、価格など多方面から考察を加えた論考。第1回水産博覧会の出品物のひとつ。

88

**琉球漆器考**

石澤兵吾(1853~1919)編 明治22年(1889)10月刊  
一冊  
沖縄県立図書館蔵

本書は琉球漆器の古文献で、琉球王朝時代の文書から漆器製造関係を整理し、石澤が解説を加え、啓四郎と沖縄の絵師、佐渡山安豊が写した漆器の絵を入れて刊行したもの。

89

## 琉球漆器考

石澤兵吾（1853～1919）編 明治22年（1889）10月刊  
一冊  
沖縄県立図書館蔵

寛延二年（1749）製の食籠<sup>じきろう</sup>の図。

「貝摺」とあるのは、螺鈿のこと。琉球王朝時代、琉球漆器は「貝摺奉行所」という役所を中心として献上品や交易品が作られた。

90

図録 p.10

## 沖縄人物図

写本 大本 一冊  
鹿児島県立図書館蔵

本書は琉球王朝時代の冠服等の服装や風俗について図入りで説明したものである。一部彩色が施されているが、鉛筆の下書きを筆でなぞった絵も多くあり、下書き段階の絵を集めたものかと思われる。「廿三年三月廿八日那覇試験場ニテ寫」等の書入れが見られる。

91

## かそうるいしんしゃず 花草類真写図

沖縄県農事試験場編、木脇啓四郎画 明治23年(1890)  
写本 一冊  
沖縄県立図書館蔵

石竹と梯梧<sup>ダイゴ</sup>。

石竹はナデシコ科の多年草。  
梯梧はマメ科の落葉高木。春から初夏にかけて図のような赤い花をつける。沖縄県の県花。

92

かそうるいしんしゃず  
花草類真写図

沖縄県農事試験場編、木脇啓四郎画 明治23年(1890)

複製

原本：沖縄県立図書館蔵

表紙

93

かそうるいしんしゃず  
花草類真写図

沖縄県農事試験場編、木脇啓四郎画 明治23年(1890)

複製

原本：沖縄県立図書館蔵

沖縄櫻

94

かそうるいしんしゃず  
花草類真写図

沖縄県農事試験場編、木脇啓四郎画 明治23年(1890)

複製

原本：沖縄県立図書館蔵

沖縄里イモ

95

かそうるいしんしゃず  
花草類真写図

沖縄県農事試験場編、木脇啓四郎画 明治23年(1890)

複製

原本：沖縄県立図書館蔵

佛桑花（仏草花）。

佛桑花とはハイビスカスの仲間の総称。アオイ目アオイ科。

96

かそうるいしんしゃず  
花草類真写図

沖縄県農事試験場編、木脇啓四郎画 明治23年(1890)

複製

原本：沖縄県立図書館蔵

丸瓢箪（ツブロ）

97

かそうるいしんしゃず  
花草類真写図

沖縄県農事試験場編、木脇啓四郎画 明治23年(1890)

複製

原本：沖縄県立図書館蔵

フロマメ。

フロマメはマメ科のジュウロクササゲの異称。

98

かそうるいしんしゃず  
花草類真写図

沖縄県農事試験場編、木脇啓四郎画 明治23年(1890)  
複製  
原本：沖縄県立図書館蔵

アダン草

99

かそうるいしんしゃず  
花草類真写図

沖縄県農事試験場編、木脇啓四郎画 明治23年(1890)  
複製  
原本：沖縄県立図書館蔵

後表紙見返し。

啓四郎による花草類写生図作成の経緯が書かれた識語。これによれば、明治20年(1887)に石澤兵吾課長から第3回内国勸業博覧会出品のために作成を依頼されて、明治23年(1890)4月に完成させたという。

100

まきみなと しゅり よなばる  
牧港・首里・与那原風景スケッチ

木脇啓四郎  
一紙  
沖縄県立図書館蔵

一枚の紙面を鉛筆の線で縦横16に分割し、その中に三段にわたって風景を墨で描く。一段目は何も描かず、二段目は山間から見た浦添の古い港、牧港の風景、三段目は首里城の景、四段目は、与那原(本島南東部)の沖合を眺望する図である。

101

もとぶまぎり  
本部間切風景スケッチ

木脇啓四郎  
一紙  
沖縄県立図書館蔵

画中には「琉球国今帰仁間切天底村より本部間切の某村遠望む景」とある。沖縄本島北部の本部半島にある今帰仁間切なきじんまぎりから本部間切もとぶまぎりを遠望したもの。「間切」とは1907年以前に使われた行政単位。

102

## 琉球国玉城城趾之図

たまぐすく

木脇啓四郎

一紙

沖縄県立図書館蔵

「<sup>たまぐすく</sup>玉城城趾」は現在の沖縄県南城市に残る城跡（国指定文化財）。13～14世紀ごろに標高180メートルの山に築かれたもので、岩をくりぬいた石門が現在も残る。

103

図録 p.10

## 那覇市街之図 (『沖縄県管内全図』より)

久米長順編 明治18年(1885)12月刊

複製

沖縄県立図書館蔵

『沖縄県管内全図』に付属するこの地図は当時の那覇の中心部を記載。図中、「勸業試験場」とあるのが、啓四郎が勤務した「沖縄県農事試験場」である。

104

## 崇元寺之図

そうげんじ

木脇藤次郎(推定)

一紙(継紙)

鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

画中の文字の筆跡から、この絵の画者は啓四郎ではなく、息子の藤次郎と推定される。崇元寺は那覇泊にあった臨済宗妙心寺派の寺院。歴代国王の霊威を祀る国廟で、戦前まで尚氏の廟所として存続していたが、戦災でなくなった。残存していた石門(アーチ門)が復元されて国指定文化財となっている。

105

## 沖縄日記

木脇藤次郎 明治16年(1883)

写本 一冊

鹿児島大学附属図書館(木脇家文書)蔵

明治16年(1883)、木脇藤次郎が浪速銀行沖縄支店に赴任した際の日記。鹿児島を出発する2月18日から6月30日までと、8月1日から3日までの記載がある。遊郭である辻の記述も興味深いものがある。

106

## 沖縄写真

複製

原本：鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

そうげんじ  
崇元寺橋

107

## 沖縄写真

複製

原本：鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

首里中城殿前の風景。

首里にあった世子（王子）の屋敷である中城殿  
なかぐすくうどん  
の前の風景。

109

## 沖縄写真

複製

原本：鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

明治橋。

明治16年（1883）、国場川に架けられた木製の橋。のちに流出して場所を変えて架け替えられた。古い明治橋の写真は珍しい。

108

## 沖縄写真

複製

原本：鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

沖縄の女性たち

110

なんとうぎつわ  
南島雑話

名越左源太（1819～1881）編  
写本 五卷五冊  
鹿児島大学附属図書館蔵

啓四郎は、鹿児島県少書記と奄美大島金久支庁長を兼務する新納中三の依頼を受け、明治19年6月～22年6月にかけて、名越左源太がまとめた『南島雑話』の写本を作成した（「島庁本」）。この「島庁本」を鹿児島高等農林学校教授の小出満二が転写したものが、鹿児島大学附属図書館本である。

111

なんとうぎつわ  
南島雑話

名越左源太（1819～1881）編  
写本 五卷五冊  
鹿児島大学附属図書館蔵

巻二の末尾の識語。  
この写本の底本である「島庁本」の作成の経緯を記した啓四郎の識語。

112

なんとうぎつわ  
南島雑話

名越左源太（1819～1881）編  
写本 五卷五冊  
鹿児島大学附属図書館蔵

巻五。  
島詰役人が島を回る際の接待の様子を描く図（右）と、大正5年10月の小出満二（鹿児島高等農林学校教授）の識語。

113

慶長之役合戦図屏風

中島信徴（1836～1906） 明治36年(1903)成  
複製（原本：六曲一双）  
原本：尚古集成館蔵

114

図録 p.10

## 朝鮮御在陣大小戦之図屏風壺双之人数

木脇啓四郎

継紙

鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

啓四郎が、屏風復元のため、屏風の各面に描かれている兵士の数を書きあげたもの。必要な絵具の量を見積もるための基礎資料として作成したものと推測される。

115

## 絵具注文依頼書

木脇啓四郎 明治24年（1881）11月20日付

継紙

鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

明治24年（1881）11月20日付で、啓四郎が島津本家に提出した絵具注文依頼書。『慶長之役合戦図屏風』復元のため京都への絵具の発注依頼したもの。

116

## 菅原神社（磯天神）の拝殿外観

117

図録 p.12

## 菅原神社（磯天神）の拝殿の格天井

明治27年（1894）、啓四郎は傷んでいた磯天神の拝殿の格天井の百草図の修復を買って出た。

118

図録 p.12

## さんごくめいしょうずえ 三国名勝図会

五代秀堯・樋口兼柄編 天保14年（1843）成

写本 大本 六十卷六十冊

鹿児島大学附属図書館（玉里文庫）蔵

薩摩藩の編纂した日隅薩三国の総合地誌。巻二には3丁にわたって磯の別邸から磯天神、桜谷の風景が描かれている。桜谷には文字通り桜の木が数多く植えられている。土砂が砲台建設に使われる以前の風景である。

119

しずのおだまき  
**倭文麻環**

白尾国柱（1762～1821）著 文化9年（1812）成  
写本 十一卷十一冊（巻九欠）  
鹿児島大学附属図書館（玉里文庫）蔵

薩摩の国学者、白尾国柱が島津領国の奇談や合戦譚などを集め、藩主島津齊興に呈上したもの。この玉里文庫本は中島信徴の筆写したものと推定されている。

120

おいしいひょうろくゆめものがたり  
**大石兵六夢物語**

毛利正直（1761～1803）著 木脇啓四郎写  
写本 一冊  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

啓四郎 81歳の明治31年（1898）10月17日に、毛利正直自筆写本を中島信徴が写した写本から再転写したもの。本文のみ写されている。

122

おいしいひょうろくゆめものがたり  
**大石兵六夢物語**

毛利正直（1761～1803）著  
写本 一冊  
鹿児島大学附属図書館蔵

薩摩藩士、毛利正直が著した近世薩摩の物語。鹿児島吉野に出没する狐の退治に向かった大石兵六が狐に化かされ散々な目にあった末、最後に狐を捕えるという内容。

121

さっとうせいしゅうろく  
**薩陶製菟録**

明治33年（1900）  
写本 一冊  
鹿児島県立図書館蔵

帝室博物館から島津本家へ薩摩焼の由来の問い合わせが来たためまとめられた薩摩焼に関する資料集。その中に啓四郎の談話の引用が含まれる。展示は木脇次郎（祐治）の唐湊の土地を開墾する際出土した「異形ノ陶器」の図。啓四郎の考証がこれに続く。

123

## 島津齊彬楽茶碗図

木脇啓四郎  
一紙

鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

明治25年（1882）10月23日、啓四郎のもとに松山三九郎が訪れ、二つの茶碗を見せた。それは島津齊彬が山口不及（齊彬の側近で、三九郎はその子）に贈った二つの茶碗—齊彬作の茶碗と黒楽茶碗（「石清水」）—であった。啓四郎はそれを絵に写し取った。近年、両茶碗が現存することがわかり話題となった。

124

図録 p.12

## 雉子図

木村探元（1679～1767）  
一幅 紙本墨画淡彩  
鹿児島市立美術館蔵

木村探元（1679～1767）は近世薩摩を代表する狩野派の画家。明治29年（1896）に探元を顕彰するため、鹿児島市の松原神社に「顕彰碑」が建立された（現存）が、啓四郎は賛助者として名を連ねている。

125

## 東郷重持書簡（啓四郎宛）

東郷重持 明治21年（1888）2月22日付  
継紙

鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

東郷重持は島津家本家の家令。啓四郎が松齡公（島津義弘）の功績を取り調べ、文部大臣へ上申したことに対する返事の手紙。「老而益御盛之御志操、実に殊勝奉存候」と啓四郎を称えている。

126

## 近衛基前<sup>もとさき</sup>和歌短冊

近衛基前（1783～1820）  
鹿児島大学附属図書館（木脇家文書）蔵

近衛基前は江戸時代後期の近衛家当主（1783～1820）。従一位。左大臣。近衛忠熙の父。

「しろたへになひく光も玉川の／波かけけりな  
里のうのはな 基前」

127

図録 p.13

## 末川周山 和歌短冊

末川周山 (1739~1827)  
鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

末川周山 (1739~1827) は垂水島津家9代貴儔の子。分家を許されて末川家を立てる。砲術と和歌に秀でる。編著作に『克己随筆』『浪の下草』など。

「名所浦月 筈屋にハ烟もたてす須磨の浦の／  
海士も夜塩を月に汲むとて 周山」

128

図録 p.13

## 栗原信充 和歌短冊

栗原信充 (1794~1870)  
鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

啓四郎からお歳暮として琉球縞の反物が贈られて栗原信充が詠んだ和歌。信充の号は柳庵 (柳闇とも)。号にちなんで自ら老い朽ちた柳に見立てて礼を述べたもの。

「歳末御尋として琉球島賜はりし時 山蔭に  
老くちにけるふるやなき／はるのめくみにかゝ  
るへしとハ 信充」

130

## 島津久徴 和歌短冊

島津久徴 (1819~1870)  
鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

島津久徴 (1819~1870) は日置島津家の13代当主。通称は左衛門。

「祐尚のもとより宇都の山の蔦の根を送られけるを謝すとて 送りこす深き心の蔦かつら／し  
らるゝあきの色に社みむ 久徴」

129

図録 p.13

## 税所敦子 和歌短冊

税所敦子 (1825~1900)  
鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

東海道の「宇都谷峠から蔦かずらを京都まで運ぶ話は『萬留』にも見える。

「するかなるうつの山のつたの細道に分入て／  
つみたるつたにうたをこひけれハ 心ある人の  
つみけん蔦なれば／よゝの霜にもかれしとそおもふ」

131

さいしょあつこ  
税所敦子 和歌短冊

税所敦子 (1825~1900)  
鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

「寄国祝 千早ふる神代のかせやわたるらむ  
／むかしになひくあしはらのくに あつ子」

132

目録 p.13

のぶあき  
中島信徴 和歌短冊

中島信徴 (1836~1906)  
鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

詞書にある、啓四郎が京都に召されたとは、文久3年(1863)に、栗原信充呼び寄せのために久光から上京を命じられたことを指すか。

「祐尚大人か都にめさるゝを祝して 隼人の園  
の荒駒乗しめて／くらゐの山をのほる君かな  
信徴」

134

木脇祐治 和歌短冊

木脇祐治 (1830~1907)  
鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

木脇祐治(1830~1907)は、啓四郎の妻かねの弟。木脇家本家の当主。戊辰戦争に従軍し東北地方へ赴く。

「みちの国の北上河に霜月半物して夜中はかり  
勇鹿の渡しより冬の月の寒るを見て 吹下すあ  
らしのうちに澄むかな／北かみ河の冬に夜の月  
祐治」

133

松元時直 和歌短冊

松元時直 (1818~?)  
鹿児島大学附属図書館 (木脇家文書) 蔵

松元時直(1818~?)は啓四郎と同じ、上荒田郷中で教育を受けた仲間であり、八田知紀の門人で、啓四郎を和歌の世界へ誘った人物でもある。

「立秋 今朝よりの秋とはたれかさためけん／  
きのふも吹し萩の上風 時直」

135